

検査項目案内

さいたま市民医療センター臨床検査科

項目名	正式名称	説明	基準となる値	
WBC	白血球数	体外から浸入する細菌やウイルスと戦ったり、免疫やアレルギーに関連した様々な働きをします。また、薬の副作用で減少することがあります。好中球・好酸球・好塩基球・単球・リンパ球の五種類の細胞からなり比率の違いは病態の把握に役立ちます。	3500 ~ 9700	/ μ l
RBC	赤血球数	呼吸により取り込んだ酸素を体中に運搬します。数が減少すると貧血、増加すると多血症の指標となります。	男 438 ~ 577 女 376 ~ 516	万/ μ l
Hgb	ヘモグロビン	鉄分の不足などによる貧血や多血症の診断根拠となります。	男 13.6 ~ 18.3 女 11.2 ~ 15.2	g/dl
Hct	ヘマトクリット	血液中の赤血球の占める割合を表します。	男 40.4 ~ 51.9 女 34.3 ~ 45.2	(%)
MCV	平均赤血球容積	赤血球1個あたりの容積を示しています。貧血の原因特定に有用な検査項目です。	男 83 ~ 101 女 80 ~ 101	fl
MCH	平均赤血球ヘモグロビン量	赤血球1個あたりのヘモグロビン量を示しています。	男 28.2 ~ 34.7 女 26.4 ~ 34.3	pg
MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度	一定容積の赤血球に含まれる、ヘモグロビン量を示しています。貧血の原因特定に有用です。	男 31.8 ~ 36.4 女 31.3 ~ 36.1	(%)
PLT	血小板数	出血したときに、集まって出血を止める働きをします。低下すると、あざや出血が起こりやすくなります。	140 ~ 379	千/ μ l
NEUTRO	好中球	細菌と戦う白血球で、感染や炎症で増加します。	42 ~ 74	(%)
Eosino	好酸球	アレルギーや寄生虫感染に関与した白血球です。	0 ~ 7	(%)
Baso	好塩基球	アレルギーに関与した白血球です。	0 ~ 2	(%)
Mono	単球	菌など異物を取り込み排除する白血球です	1 ~ 8	(%)
Lymph	リンパ球	免疫に関与し、ウイルスと戦う白血球です	18 ~ 50	(%)
TP	総たんぱく質	値の変動は、蛋白を作る肝臓や濾過する腎臓の異常の指標となります。	6.5 ~ 8.2	g/dl
ALB	アルブミン	血清総蛋白の50~70%を占め、カルシウム等の各種物質の運搬に重要な成分です。栄養の摂取や吸収障害など全身状態の参考となります。	3.7 ~ 5.5	g/dl
AST	アスパラギンアミノトランスフェラーゼ	主に肝臓、心臓、骨格筋の細胞の中にある酵素です。これらの臓器に障害が起こり細胞が壊れると、数値が上昇します。	10 ~ 40	IU/l
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ	肝臓の細胞に含まれる酵素で、肝臓に障害があるとき増加します。肝臓の異常以外で上昇することはほとんどありません。	5 ~ 45	IU/l
LD	LDH、 乳酸脱水素酵素	肝臓、心臓、肺、赤血球などに多く含まれる酵素で、これらの組織の細胞が壊れると数値が高くなります。	120 ~ 245	IU/l
ALP	アルカリホスファターゼ	肝臓や胆道系に障害があると数値が高くなる酵素です。また骨の異常でも高くなる場合があります。	104 ~ 338	IU/l
LAP	ロイシンアミノペプチダーゼ	全身の臓器に広く分布する酵素の一つです。肝臓や胆道系の病気の指標となります。	30 ~ 78	IU/l
γ -GT	ガンマーグルタミルトランスペプチダーゼ	肝細胞に多く存在する酵素です。肝障害や胆道系の疾患で数値が高くなります。また、飲酒との関係が高くアルコールの常習を検出する目安となります。	男 0 ~ 79 女 0 ~ 48	IU/l

項目名	正式名称	説明	基準となる値	
CHE	コリンエステラーゼ	肝臓で作られる酵素です。数値の減少は、肝臓の機能低下の指標となります。	男 245 ~ 495 女 198 ~ 452	IU/l
CK	クレアチニンホスホキナーゼ	心臓や骨格の筋肉に存在する酵素です。これらの組織が壊れると数値が高くなります。	男 50 ~ 230 女 50 ~ 210	IU/l
T-Bil	総ビリルビン	肝臓で作られ、胆のう、十二指腸、便という経路で体から排出されます。その途中で障害があると数値が高くなります。黄疸の指標です。	0.3 ~ 1.2	mg/dl
T-CHO	総コレステロール	細胞やホルモンつくる材料の一つです。過剰になると、心筋梗塞や脳梗塞を起す原因となります。	150 ~ 219	mg/dl
HDL-C	高比重リポ蛋白コレステロール	善玉コレステロールと呼ばれ、動脈硬化を防ぐ働きがあるとされています。たばこや運動不足で低下します。	40 ~ 90	mg/dl
LDL-C (直接法)	低比重リポ蛋白コレステロール	悪玉コレステロールと言われ、多くなりすぎると動脈硬化を進める方向に働きます。	70 ~ 139	mg/dl
TG	中性脂肪	食物から吸収された糖質や脂肪から作られます。皮下脂肪や肝臓に蓄えられます。食後は高値となります。動脈硬化の促進に関連します。	50 ~ 149	mg/dl
UN	尿素窒素	食物中のタンパク質などが代謝された後に出来る、窒素を含む老廃物です。腎臓や肝臓の機能の障害や脱水症状・タンパク質の過剰な摂取によって値が高くなります。	8 ~ 20	mg/dl
CRE	クレアチニン	腎臓の機能が低下すると尿中への排泄が減少し、血液中に増加します。腎臓機能の指標となります。	男 0.65 ~ 1.09 女 0.46 ~ 0.82	mg/dl
UA	尿酸	肉などプリン体を多く含む食物を摂取すると、増加します。腎臓や肝臓の機能に障害があると数値が高くなります。	男 3.6 ~ 7 女 2.7 ~ 7	mg/dl
Na	ナトリウム	体液の浸透圧維持のため、各種ホルモンや腎臓により血中濃度がコントロールされています。脱水、腎障害、下垂体や副腎由来のホルモンに異常があると、血中濃度が高くなります。	135 ~ 145	mEq/l
Cl	クロール	呼吸不全や腎障害など体液の酸性・アルカリ性のバランスが崩れると異常値となります。	98 ~ 108	mEq/l
K	カリウム	神経や筋の細胞機能維持に重要な役割を果たしています。	3.5 ~ 5	mEq/l
Ca	カルシウム	副甲状腺由来のホルモンの骨や腎臓に対する作用により、血中濃度は厳密にコントロールされているため、食事の影響はほとんど受けません。	8.2 ~ 10	mEq/l
IP	無機リン	腎障害やホルモンの異常で高値となることがあります。食事の影響を受けやすく、日内変動も大きい項目です。	2.5 ~ 4.5	mg/dl
血糖	血糖	血中のブドウ糖の濃度です。インスリン等のホルモンにより調節されています。糖尿病などにより調節機構に異常が起きると異常値となります。	70 ~ 109	mg/dl
HbA1c (NGSP)	ヘモグロビンエーワンシーグリコヘモグロビン	過去の平均的な血糖値を反映し、約1~2ヶ月に及ぶ血糖のコントロール状態を知る指標となります。HbA1c(JDS)に代わって、平成24年から使われるようになりました。	4.6 ~ 6.2	%
CRP定量	C反応性タンパク	炎症や組織の破壊が起こると、すぐに増えるタンパク質です。回復と共に減少するので炎症症状の指標となります。	0 ~ 0.3	mg/dl